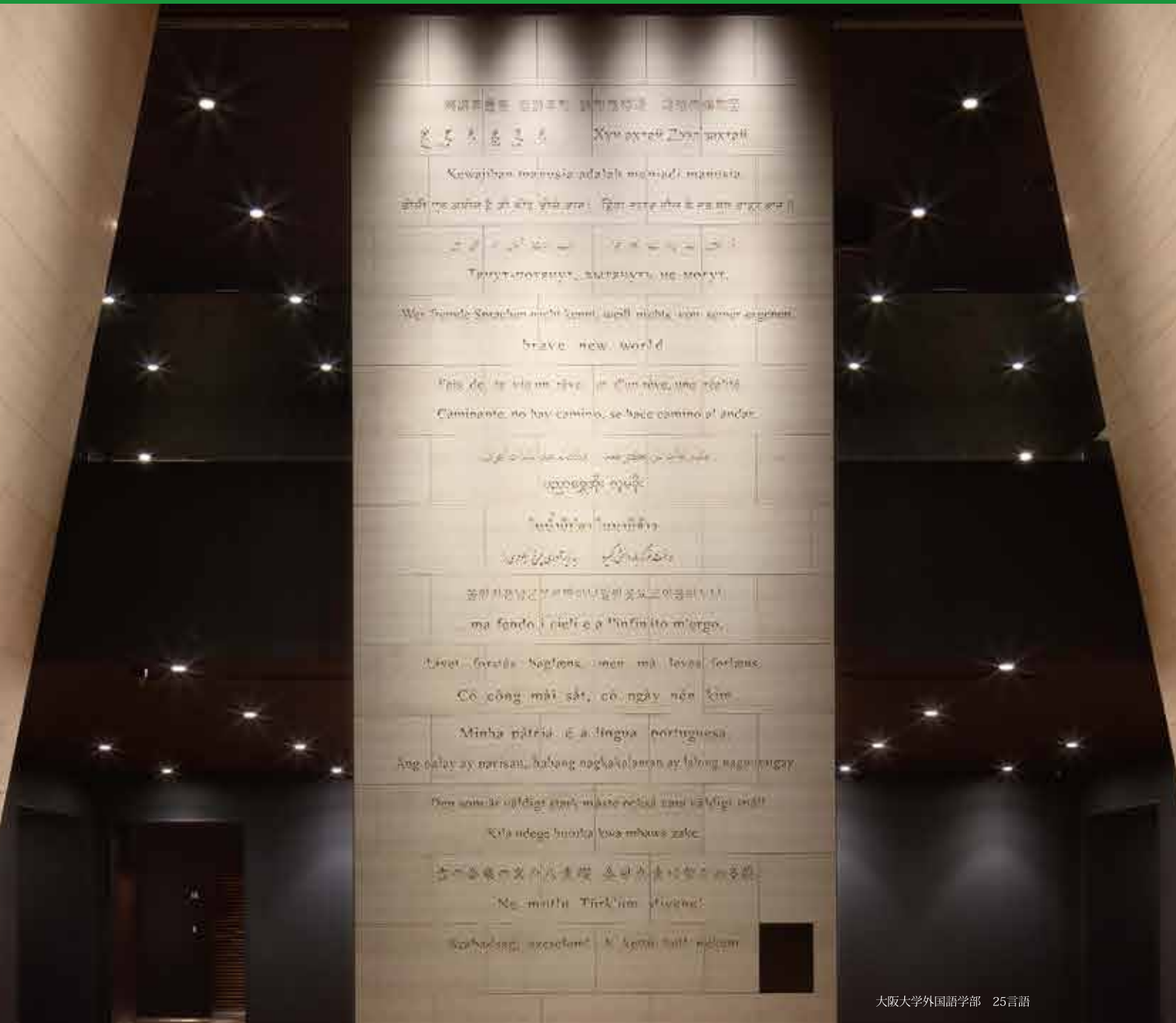
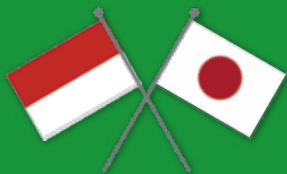


Bintang pari

南十字星



大阪大学外国語学部 25言語



南十字星会
大阪大学外国語学部
インドネシア語専攻同窓会

第28号

2022 夏

Contents

- 1... ご報告 (募集定員問題について)
- 3... EPA (経済連携協定) 看護師・介護福祉士候補者の国家試験への挑戦
- 5... Salam dari Kampuns !
- 7... インドネシアと東ティモールから私は何を学んだのか
- 9... 長い海外駐在員生活にカーリングを!
- 12... インドネシア釣り紀行
- 15... リアウ大学への派遣後に日本語学校を設立
- 16... 増井さん・今は無き同期への思い
- 19... インドネシア政治・経済の近況
- 22... ジャカルタ暮らしの楽しみ方
- 25... EPAに基づく看護師・介護福祉士制度の実態紹介
- 27... 外大100周年、阪大90周年式典への出席報告と阪大のランキング&令和3年度入学結果 (各語学科)
- 31... 丹羽慎吾氏作品集
- 35... 磯田元会長 追悼
- 38... 投稿・寄稿のお願い、協賛者一覧
- 39... お知らせ
会計報告 (令和4年3月31日)
編集後記

ご報告 (募集定員問題について)



南十字星会会長
小原 一浩
(1963 年卒)

コロナ禍や、露軍によるウクライナへの破壊的な侵略など想定外のことが起こっている地球上ですが、お変わりなくお過ごしのことと存じます。

さて、南十字星会が願望していたインドネシア語学科の募集人員の復旧がやっと叶った事を報告申し上げます。

この4月に大学当局から令和6年度から実施する外国語学部の募集人員の発表がありました。募集人員に同窓会が改善方を要望するのはイレギュラーの感があり、また、総長宛ての「請願書」がどれほど功を奏したか分かりませんが、改善されたことは喜ばしい限りで、大学にとっても大変良かったと信じています。ただ、問題解決に10年以上を要したのはいささか理解しがたいものを感じています。

この間、入試に関連する「学力」についても考えさせられました。最近では大学入試のための中高一貫教育や塾教育が盛んですが、人間の能力には簡単に測れるものと測れないものがあります。一見平等に見えますが、一発勝負の入学試験で受験生を評価するのは難しいものです。

知識や狭義の技能は測りやすいが、「読解力」「論述力」「討論力」「批判的思考力」「問題解決力」「追及力」などは測定しにくい力です。

一方、学ぶ力である「学習意欲」「知的好奇心」「学習計画力」「学習方法」「集中力」「持続力」「コミュニケーション力」などは測定が難しい項目です。大学生活で求められるのは、基本を身に付け、自ら課題を見つけ、学び、考え、主体的に判断し、行動できる「豊かな学力」

と、自らを律しつつ、他人と協調し、思いやる心や感動する「豊かな人間性」、そしてたくましく生きるための「健康や体力」、それらが合わさった「生きる力」です。

激しく変化して行く世の中ですが、入学者が素晴らしい人材として卒業されることを、そして、大阪大学がますます発展されることを心からご期待申し上げます

外国語学部 語学科 一般入試定数の推移

南十字星会調べ

	語学科	統合前	統合後	R3	R4	R5	R6	国語・公用語国数 (推定)	使用人口 (推定)
1	中国語	55	40 (-15)	40	40	40	37	中国・台湾・シンガポール他	14億人
2	ヒンディー語	15	18 (+3)	18	18	18	18	インド	5億4000万人
3	英語	60	60 (+0)	60	60	60	60	英米等 第二外国語約80か国	4億5千万人
4	スペイン語	40	35 (-5)	35	35	35	31	スペイン・中南米諸国 (除ブラジル)	4億2000万人
5	インドネシア語	20	10 (-10)	12	12	12	18	インドネシア・マレーシア・ブルネイ・シンガポール	3億人強
6	ポルトガル語	25	30 (+5)	29	29	29	24	ポルトガル・ブラジル	2億5000万人
7	アラビア語	25	25 (+0)	25	25	25	24	サウジ・イラク・ヨルダン・UAE・イエメン	2億3500万人
8	ロシア語	40	25 (-15)	25	25	25	24	ロシア・ウクライナ・ベラルーシ旧ソ連圏諸国	1億8000万人
9	ドイツ語	25	35 (+10)	34	34	34	31	ドイツ・スイス	1億3000万人
10	フランス語	30	25 (-5)	25	25	25	24	フランス・アルジェリア・スイス等	1億2900万人
11	フィリピン語	15	12 (-3)	12	12	12	18	フィリピン・英語	9200万人
12	朝鮮語	15	18 (+3)	18	18	18	18	韓国・北朝鮮	7500万人
13	トルコ語	10	18 (+3)	18	18	18	18	トルコ・アゼルバイジャン他中央アジア諸国	7300万人
14	ベトナム語	10	15 (+5)	15	15	15	18	ベトナム	7000万人
15	ウルドゥー語	15	18 (+3)	18	18	18	18	パキスタン	6100万人
16	ペルシャ語	15	18 (+3)	18	18	18	18	イラン	6100万人
17	イタリア語	30	18 (-12)	18	18	18	18	イタリア・クロアチア (イストラ郡)	6100万人
18	タイ語	10	15 (+5)	15	15	15	18	タイ	5000万人
19	ビルマ語	10	18 (+8)	18	18	18	18	ミャンマー	5000万人
20	スワヒリ語	25	18 (-7)	18	18	18	18	ケニア・ウガンダ・タンザニア・ブルンジ	5000万人
21	ハンガリー語	15	15 (+0)	15	15	15	18	ハンガリー	1450万人
22	スウェーデン語	15	18 (+3)	18	18	18	18	スウェーデン	900万人
23	デンマーク語	15	18 (+3)	18	18	18	18	デンマーク	530万人
24	モンゴル語	15	18 (+3)	18	18	18	18	モンゴル	290万人
25	日本語	40	40 (+0)	30	30	30	27	日本	1億2000万人
	合計	590		570	570	570	570		

<注>使用人口数はR2年現在 (推定) *使用人口 (推定) により降順で表示。 <出所>【令和6年度入学者選抜の募集人員は令和4年4月の大学公式HPからの抜粋】

EPA（経済連携協定） 看護師・介護福祉士候補者の 国家試験への挑戦



日本インドネシア協会元参与
西田 達雄（1960年卒）

第111回看護師国家試験合格者数（厚労省'22.3.25発表） ※（）内は昨年度の数字

	受験者数	合格者数	合格率
総計	65,025人 (66,124人)	59,344人 (59,769人)	91.3% (90.4%)
EPA看護師候補者	370人 (335人)	44人 (70人)	11.9% (20.9%)
インドネシア	142人 (140人)	9人 (17人)	6.3% (12.%)
フィリピン	135人 (111人)	11人 (25人)	8.1% (22.5%)
ベトナム	93人 (84人)	24人 (28人)	25.8% (33.3%)

第34回 介護福祉士国家試験合格者数（厚労省'22.3.25発表） ※（）内は昨年度の数字

	受験者数	合格者数	合格率
総計	83,082人 (84,483人)	60,099人 (59,975人)	72.3% (70.0%)
EPA介護福祉士候補者	1,014人 (953人)	374人 (440人)	36.9% (46.2%)
インドネシア	488人 (400人)	122人 (146人)	27.2% (36.5%)
フィリピン	380人 (375人)	96人 (130人)	25.3% (34.7%)
ベトナム	186人 (178人)	156人 (164人)	83.9% (92.1%)

上記がEPA（経済連携協定）をベースに、インドネシア・フィリピン・ベトナムより来日し、日本各地で働きながら学ぶ看護師・介護福祉士候補者が2021年度国家試験に挑戦し、その結果となる合格者数であり（厚労省2022・3・25発表）、本件を昨年に続きレポートさせていただきます。

EPA看護師・介護福祉士候補者にとり、日本語による受験であり、極めて難関であることに変わりないが、二年余も続くコロナウイルス感染禍の下での日常生活や受験勉強に種々なる支障があったものと想像され、昨年に比べ合格率も大きくダウンしております。

看護師候補者は来日後に年一度の国家試験に2-3回挑戦し、滞在期間は3年ですが、1年延長して受験可となり、また、帰国後も再受験可となっておりますが、この場合は受入れ病院側の経費的支援も必要でしょう。介護福祉士候補者は3年間の現場での実務経験を経て4年目に受験資格を得て受験となり、不合格となれば帰国となりますが、こちらも成績に依り、一年延長は可能なようです。

このEPA看護・介護候補者の受入れ制度は、インドネシアが2008年、フィリピン2009年、ベトナム2014年にスタートしており、以前にはインドネシアからは日本語能力"N-4"取得、フィリピンからは"N-5"

取得、ベトナムからは"N-3"取得を受入れ条件としてきたが、最近ではこの条件を適宜緩和して、受入人数を確保しているようです。この受入れ制度とは別に、技能実習制度に依る"介護"分野の追加や2019年にスタートした"特定技能制度"（正式に外国人労働者としての受入れ）での受入れも可能となり、EPA制度に依る介護候補者の受入れも減少傾向が続いています。尚いずれの制度も国家試験に合格すれば、家族帯同も可能となります。

現時点での、2022年度受入れ予定数は次の通り。

	看護師候補者数	介護福祉士候補者数	合計
EPA候補者数	62人	662人	724人
インドネシア	17人	280人	297人
フィリピン	23人	236人	259人
ベトナム	22人	146人	168人

関係者に依ると、インドネシアからは6月中旬に、フィリピン・ベトナムからは7-8月に入国予定とのこと。また政府間協定では各国共に年間で、看護師候補者数はmax200人、介護福祉士候補者数はmax300人となっておりますが、昨今では看護師候補者の大巾未達は続いております。

研修については、インドネシア・フィリピン共に、自国で6か月間、日本で6か月間、ベトナムは自国で12か月間、日本で2か月間となっており、インドネシアについては自国で国際交流基金が行い、日本でAOTS（一般財団法人海外産業人材育成協会）と担当が決まっている由で、今年も従来通りの担当です。

唯、昨今コロナ禍の中での現地研修はオンラインで実施され、自宅での学習であったために、学習に集中出来る環境ではなかったこともあり、例年に比べて日本語の基礎習得不十分のまま来日した候補生も多いようで、日本での研修担当・AOTSもカリキュ

ラムに修正・調整等工夫しての対応が必要とのこととです。

また現実の三方国に共通する看護師候補者数の大巾減に加えて、合格者数・合格率が極めて低いことから、この制度を廃止して、人数を限定して大学看護学部や看護師養成校への留学制度に転換することに依り、相手国の人材育成に協力しては如何かとの小生は私見を持ち続けていますが、実現しないでしょう。

日本でも早くコロナ収束となって、従来行ってきたように、①小生古巣の住友商事社員やそのインドネシア駐在経験OBに広く呼掛けて、中古を含む"冬物衣料"の提供を求めて、毎年12月末近くに合意済の各地病院・施設に赴く彼等に男・女の冬物衣料を日本インドネシア協会経由配布した事、また②日本側EPA関係者（外務省・厚労省、受入れ斡旋期間、研修担当団体、日本インドネシア協会、日本ベトナム協会等）との横断的な懇親会の開催など①・②の再開を小生としては心から願っております。

この国内での研修後に、各候補者は各々合意済の日本各地の病院・介護施設に赴き、働きながら学んでの国家試験への挑戦となります。私的な事ですが、昨年12月日本経済新聞の報道で、小生のふるさと、京都・丹波の田舎の介護施設ではコロナの影響でフィリピンからのEPA介護候補者到来大巾に遅れて大変困っていると大きく報じられておりました。次回帰郷の際には同施設を訪ねてみたいと思っており、本制度をより身近に感じたことでした。

南十字星会員の皆様におかれましては、彼等各人にとり異国の地・日本各地の病院や介護施設で真面目に働き、懸命に学ぶ彼等との出会いやお見かけの機会があれば、進んで暖かい激励の声を掛けていただきたく特にお願ひ申し上げます。



AOTS 提供

（習字研修）



（日本語成果発表）

Salam dari kampus!

キャンパス便り

大阪大学 人文学研究科
外国学専攻教授

菅原 由美 (すがはら ゆみ)

2021年4月は船場東の新箕面キャンパスでのスタートとなった。新キャンパスは教室内の換気システムが最新式であるために、コロナ禍でも対面式に耐えられるという話だったが、前期が始まってすぐに、新型コロナ蔓延第4波の影響により、授業はオンラインに逆戻りとなった。しかし、後期にはなんとか対面式に戻ることができた。

1年生は14人入学(うち1名は日本語専攻インドネシア語選択)。男子10人、女子4人というインドネシア語専攻としてこれまでにない男女比となった。彼らは2021年度から始まったマルチリンガルエキスパート養成プログラム(MLE)の「インドネシア語・インドネシア研究」に参加する学生数名(経済学部など他学部)と一緒に授業を受けている。とても元気のよい学年で、ハロウィーンにはハロウィーン仮装、クリスマスにはサンタ衣装をつけて、授業に参



国フェス

加していた。7月にはTAのBayuさんやその他のインドネシア人留学生と協力して、国際フェスティバル(国フェス)に参加し、3階のピロティのテントで、ピサンゴレンを作って販売した。入場は事前予約制で、観客は入口で手首にバンドをつけられ、飲食は決められた場所という厳戒態勢での国フェスであったが、ピサンゴレンの売れ行きは好調だったようである。11月には、昨年同様、UIの学生に対しオンラインで発表会を行った。

1年前に全面コロナ禍で授業開始を経験した2年生は、インドネシア合宿や三大学合同ゼミの代わりに、2022年1月にインドネシア留学生協会(PPI)のメンバーの前で、日本に関するプレゼンテーション(①日本人の定義、②日本人の宗教、③日本が抱える課題)をインドネシア語で行った。各班、前期から綿密に調査し、議論して作ったプレゼンであったが、留学生からもとても鋭い質問やコメントが出て、返答に窮する場面が見られた。この2年生から、2022年の夏に、阪大の交換留学制度を使って、はじめてガジャマダ大学やシンガポール大学に留学する学生が出る。



2年生

2022年2月1日には、1年ぶりに対面で全学年揃ってのインドネシア語専攻卒業論文試問会が開催された。発表者は、留学帰国組5回生11名と、4回生7名で、なかなかの力作揃いであった。彼らは無事3月25日に卒業式を迎えた。同じく3月末にUIから3年前に着任されたDwi Puspitorini先生が帰国され、4月に同じくUIのBIPAで教鞭を取られてきたCynthia Vientiani

先生が着任された。また、国際公共政策研究科の松野明久先生も3月でご退職となり、最終講義「冷戦期政治暴力の研究—インドネシアと東ティモールを事例として」が2月22日にオンラインで行われ、国内外から140人を超える人々が参加した。インドネシア語学科卒業生によるお別れ会もオンラインで開催されたようである。



卒論試問

フランス極東学院(EFEO)のジャカルタ・オフィスの長として20年以上勤められたHenri Chambert-Loir先生が、日本学術振興会の長期招聘研究員として2021年9月に言語文化研究科に着任し、2022年4月まで箕面キャンパスで菅原とマレー文学について共同研究をおこない、インドネシア語専攻3~4年生にインドネシアの近代美術についての講義もしていただいた。



卒業式



Wiwik先生

2022年度の新1年生は14人で(うち1名日本語専攻)、女子9名、男子5名である。

なお、この2年でインドネシアについて研究する大学院生の数も増えている。博士前期過程に2021年4月に2名、2022年4月に2名が入学した。大学院は、2022年4月から、文学研究科と一体化し、言語文化研究科から新しく人文学研究科となった。



1年生

インドネシアと東ティモールから私は何を学んだのか



松野 明久 (大阪大学名誉教授)

私 はこの三月に大阪大学を定年で退職し、一九八三年から三九年に及んだ教員生活を終えた。そのうち大阪外大インドネシア語専攻に二四年、阪大との統合後国際公共政策研究科に十五年籍を置いた。インドネシアとの付き合いは大学に入学した一九七五年から数えると四七年になる。その間、インドネシアもインドネシアを取り巻く世界も大きく変わった。退職した今、そこから私は何を学んだのかを振り返ってみたい。



ひ とつは、政治の世界に永遠なるものはないということである。私の場合「いい意味で」そう思っているのだから、シニカルな真理を述べているのではない。(ただ、今の世の中、ミャンマーやウクライナの情勢を見るにつけ、変化は進歩だなどと言えないことも多いとは思ふ。)

イ ンドネシアについては、スハルト新秩序の崩壊がまさにそれを示したできごとだった。一九六五年以前を知らない世代にとって、新秩序こそ

がインドネシアだった。そして体系としての新秩序の論理構造を明らかにすることによってインドネシアを「理解する」ことと考えていた。その体系が、実は、ある特定の歴史的条件下で生まれたものであって、すべての歴史的事象がそうであるように、生成・発展・消滅のサイクルから免れられないものだというところにほどなく気付くわけだが、学生の頃の私は、さしずめプラトンの洞窟の比喻(人は壁に映る影を見てそれを真実とってしまう)のように、目に見えているものに捕らわれていた。おそらく、こうした「現実を受け入れる」構えは、私がインドネシアに留学した一九七〇年代が、デタントの深化、米中接近・日中国交回復、ベトナム戦争の終結といったできごとを背景として、楽観主義が漂っていた時代だったからかも知れない。



私 が新秩序体制のほころびを理解するようになったのは東ティモール問題を通してだった。一九八三年、私は東ティモール問題の勉強を始めた。理由はそれが「知らない」ことだったからだ。世界を知りたいと思って外国研究を志し、よく知られた欧米ではなく、「知らない」世界への好奇心や冒険心からインドネシアを選んだ私にとって、「知らない」東ティモールは興味を誘った。そして東ティモールを知ることを通じて、私は周縁から中心を見る視点を学んだ。周縁に立つと中心がよく見える。それは、イマヌエル・ウォーラーsteinがアフリカで見た矛盾から近代世界システムという世界を覆う仕組みを展望できたのに似ていた。

東 ティモールの状況が不正義であるのはすぐに理解できた。ただ、私はそれを不正義というよりまずは不合理とみた。約一万五千人とも言われる自国兵士の犠牲を払い、一方で東ティモール人の抵抗は止まない。そのため軍事占領を続けざるをえず、そういう状況では国際的承認は得られない。国際的承認が得られなければ、東ティモール「統合」

の事業を完遂することはできない。「東ティモール人はインドネシアを歓迎している」という嘘で始まった「統合」の事業は、その嘘が明らかになるにつれ、矛盾を覆い隠すことができなくなっていた。要するに現状は維持不能であり、何らかのきっかけで均衡が崩れれば変化は不可避だったのである。

そ してその均衡は一九九八年五月のスハルト退陣によって一気に崩れ、後を継いだハビビ政権は国連による東ティモールでの住民投票を受け入れた。結果は七八・五%が独立支持。東ティモールは二〇〇二年五月に悲願の独立を達成した。ちなみに今年はその二〇周年にあたる。



そ れでは、矛盾や嘘が明らかとなりそれを取り繕うことができなくなったとき変化が訪れるというのは必然なのだろうか。嘘の上に立つ強者は真実を掲げる正義に負ける、と言えるだろうか。世の中必ずしもそうではない、というのが常識であろう。一九八〇年代から九〇年代、東ティモールが独立できるなど多くの人は思わなかった。私自身は、正義がそうだからというのではなく、合理的な分析として、東ティモールという矛盾にインドネシアは耐えられないだろう、どのようなかたちはわからないがいつか破綻が訪れ、変化が訪れる、そう踏んでいた。

た だ、その一方で、不正義を正すなどという、成功するあてもない倫理へのコミットにどういう意味があるのかという問いが頭を離れなかった。(紛争地の現場で命をかけて闘う人びとにとってはまさに切実な問題だろう。) 幾ばくかの救いがえられたものに、丸山真男のいう不確実な未来に向けて人が行う政治的決断、ヴァルター・ベンヤミンが書いた歴史の天使が見つめる敗者の存在、そしてサルトルの主体の哲学があった。つまり、インドネシアと東ティモールから私が学んだことは、人の行動や選択は、成功や勝

利といった輝かしい未来のためではなく、善き今のためのものに他ならないということだった。ことばを変えて言えば、未来の成功が現在の行動の価値を決めるのではない、現在の行動はそれ自身、現在において価値をもつということ。その価値の体系を生みだしているのは自分であるということ。そう考えたとき、成功するとか失敗するとか、勝利するとか敗北するとかに関係なく、今を善く生きようとするすべての人びとの生き方そのものに意味があると思えるようになったのである。

阪 大との統合後、私はパレスチナ、西サハラ、北アイルランド、アルゼンチン、タイ、フィリピンなどを訪れたが、そこで出会った人びとの生き方を見て、ますますそう思うようになった。インドネシアと東ティモールを人生の「砂場」として私が学んだことは、不確実性の時代において主体的に生きることの意味だったと思うのである。





決勝戦前の行進
6チーム24名のCurlers

長い海外駐在員生活にカーリングを！

瀧口 昇治 (1963年卒)

2021年10月、コロナ禍の最中、約一年半遅れていた老齢永久帰国を強行して羽田に到着しました。1976年9月にNew Yorkに赴任して以来日本で再勤務するチャンスは一度も無く、実に45年振りに日本生活に復帰した次第。多くの海外駐在員とは少し違った経験のひとつに、日常的にカーリング (Curling) を楽しむことが出来たことです。ニューヨークで30年参加していた自宅近くのArdsley Country Club (1885年設立) に隣接してCurling Clubが活動していたことが発端でした。

このArdsley Curling Clubは1932年設立で、世界大会のアメリカ代表や各種目でNational Championsを輩出しています。日本女子チームの五輪等での活躍もあって、TVなどでもOlympic Sportsの一つとし

てのカーリングはしばしば紹介されているので、競技やルールの解説は割愛します。

このスポーツには氷上に長さ約40メートルのアイスシートが必要なのでJakarta駐在中は楽しむチャンスはありませんでした。



米国の各都市には古い歴史のあるCurling Clubが数多く活動しています。それぞれのクラブは独立した自主運営の組織です。米国東海岸のFloridaからMaine州に存在するクラブが連合してGrand National Curling Club (GNCC) を組織して、Senior Men's Championshipsなどの大会を開催しています。

私はこの大会で優勝したArdsley Curling Clubチームのセカンドとしてプレーしたこともあります。私は

ElmiraでのNYC地下鉄車両改修事業の任務を終えて、再度ニューヨークに舞い戻り、1991年からこのArdsley Curling Clubに参加していました。このクラブでは約7ヶ月のCurling Seasonを前半と後半に分けて、月曜夜はCompetitive (Open 性別無関係)、水曜夜はMen's、火曜日夜と木曜日朝はWomen's、金曜朝がSeniors、金曜夜と土曜朝がMixed (男女各2名) と振り分けて、それぞれチームを編成して全チーム総当たりで試合をしました。



私と妻 (同期生) はいずれにも参加し、またシーズン中に開催されるクラブ内のEvents・大会 (Bonspiel) にも欠かさずに参加しました。各都市にあるクラブは他のクラブに声をかけてBonspielを主催します。Ardsley Curling Clubは毎年McKay Douglas Internationalと言うBonspielを主催しています。海外からの参加もあります。私もある年にはTorontoのチームにリードとして加わったことがあります (惜しくも準優勝)。

2022年9月には、コロナ禍で延期している第84回大会が予定されています。このBonspielはトーナメントを組み易い24チームを上限に、木曜夕方から始まり、日曜午後が決勝戦です。決勝リーグに残れなくても4試合を保証し食事も提供して、土曜夜は試合数を少なくしてバンドを入れたり、寸劇を演じたりして一大パーティーになります。

日曜午後の決勝戦 (6チーム、6メダル) には、バグパイプ奏者を招き、その演奏に合わせてリンクを行進してからゲームを開始します。東海岸各州のBonspielには、Men's部門は私一人で、Mixed部門は夫婦で、Chicago、Boston、Cape Cod、Philadelphia、Baltimore、Albany、Shenectady、Utica、Plainfield、Norfolk、BridgeportなどのBonspielに参加しました。



勝敗には拘らず、ただカーリングを愛しsportsmanshipの下でゲームを楽しみ、カーリングをプレーできる健康に感謝して、例年のBonspielで顔なじみになったカーラーとか初めて対戦した他のクラブからの参加者との友好を深めました。

カーリングは、通常はゴルフと同じように、本来は審判員が存在しないセルフジャッジ競技です。スポーツマンシップが重要視され、相手チームの失策を喜んだり、そのような態度を示すことは慎むべき行為として忌避されています。途中のエンドの終了時に自チームに勝ち目がないと判断したときは、潔く自ら負けを認め、それを相手に握手を求める形で示すという習慣もフェアプレーの表れの一つであり、勝ったチームも抱き合うなどして喜びを表現する前に相手と握手する習わしです。



Stoneを投じた直後、右のSweeperは妻 (同期生美恵子)



Gameの後の対戦相手との団欒

私は、初心者向けInstructor、Ice Making Technician、公式審判員資格などのセミナーにも参加しましたが、知識・技術など以前に、精神とスポーツマンシップを理解して実践することが合格の条件でした。

カーリングは初心者級であってもOlympic級のカーラーと一緒に、また対戦相手としてゲームが出来るスポーツです。試合後は勝ったチームが負けた方に飲み物の一杯目をオファーして、敗者は二敗目

をお返ししながら団欒し親交を深めます。一方で、不文律の鉄則があります。職業、地位、人種、貧富などは一切不問とする事、試合後の団欒の席では同席していない人の悪口は一切口にしない、政治・宗教は話題にしない、仕事の話はしない事などです。

Bonspielでは日本人夫婦は私達だけでしたが、日本人であるが故に不快な思いをさせられた事は一度もありませんでした。ご一緒する方々は大学教授、米国のさる科学学会会長、元国連の中国語通訳官、順風満帆の投資・金融家、実業家、弁護士など多士済々でしたが、日本商社員上がりと侮蔑まがいの視線を受けたことはありません。何とも公明正大、包容力のある紳士淑女ばかりで、大変恵まれた楽しいお付き合いでした。



決勝戦のあと両チームに贈られるMedalの一例

インドネシア釣り紀行

江本 浩章 (1992年卒)

① 釣りとの出会い

徳島で生まれた私は、小学生低学年から近くのドブ川でフナ釣りに勤めました。3・4年生になって小松島港の防波堤でカサゴ、キス、アイナメ釣りなどを友人に教えてもらい、高学年には近所のどぶ川で、ナマズのルアー釣りに夢中になっていました。

両親が共働きのかぎっ子だったので、時間がたっぷりあった土日には、友人たちとよく釣りに出掛けたものです。魚が針にかかった時の何とも言えない手ごたえと興奮した気分が、私を釣りに駆り立てました。

中学時代に部活が忙しくなってからは、釣りとは無縁になっていましたが、ジャカルタ駐在を契機に、30年ぶりに再開を果たしました。その後のインドネシアでの釣り生活を場所ごとに総括いたしました。



インドネシア INDONESIA



② ジャカルタ日帰りPulau Seribu釣り

早朝の3時半にアンチョール桟橋に集合し、6名の釣り師と3名の乗組員で出航。通常は油田近くまで約1時間走らせて、まず生餌のテンバン(アジの小型)をサビキで釣り始める。狙いはサワラで、表層を「泳がせ釣り」で狙い、「中り」がなければタイ、ハタなどの底物を生きエビで狙う。ポイントは船長が知り尽くしているので縦横無尽にボートを走らせてポイントを回る。中りはずれはあるものの、小さい揚げ物用Ekor Kuning(gorengan)からハタ、タイなど宴会が出来るサイズまで楽しめる。通常は13時ぐらいに帰港して解散となるが、釣り初心者でも気軽に楽しめる内容である。

必要費用は船代、食事代、チップ込みで6.8juta。それを参加人数(5-6名)で割ると一人当たり1.1juta位。

③ バンテンBinuwangan 30時間超釣り合宿

この合宿は、金曜日の夜にジャカルタを出て5時間程かけてバンテン州Binuwanganという港町に行き、翌日の早朝3時に出航し、日曜日の午前中10時ぐらいまで30時間以上船にのってインド洋を動き回るダイナミックな釣りである。船の定員は7・8名でエアコン付きの仮眠ルームがあり、波が高い時などはそこで休める。海の深さは100メートル以上あるため、手巻きより電動リールが必須である。特に入れ食い状態の際は、電動リールでなければ対応が難しい。ナガサキフエダイ、ナミフエダイ、オオグチチビキ、サワラなど時には10kg近い大物が上がることもある。

通常はマグロのぶつ切りを餌にするが、ジギングという疑似餌を使う釣り方もポピュラーで、夢のGT（ロウニンアジ）を吊り上げる釣り人もいる。何より楽しいのは、釣り好きが集まり、釣り談義に花を咲かせながら時間の過ぎ行くままに釣りに没頭できることである。酒に酔っているのか船に酔っているのかわからない時があるが、釣りに没頭している時は至福である。近々マグロ狙いに出向く予定である。費用は船代、食費、チップ、交通費など全部こみこみで24juta。それを8名で割勘。



④ バリ島深海釣り（キンメ）

バリ独特の伝統的な船にのって南のNusa Penida周辺への深海釣り行きである。海の深さは200-250mもあり、1kgの重りでさえ底が取れない状態である。大口チビキをジギングで狙ったが、食いが悪く不発に終わる。生餌で200m以上底のキンメダイを狙うもアタリがとれず、結局、船長にお願いして分けて貰うことが出来ました。迂闊だったのは、釣った魚をジャカルタ迄持ち帰る積りが、生もの機内持込禁止（預入荷物も不可）となり、バリ島でお世話になった方に献上することになった次第。釣った魚はその土地で食すべきであるということ学びました。



⑤ 料理のだいご味

魚を釣ることも大好きですが、料理することも醍醐味の一つです。Agingしてからの刺身、煮つけ、南蛮漬け、西京漬け、あら汁、タイ飯、から揚げ、ムニエルなどにして家族や友人たちと一緒に楽しい宴会を頻繁に開いています。下処理は面倒な作業ですが、魚料理は奥が深く学ぶことも多いものです。



インドネシア・ プカンバル(リアウ州)で 日本語学校を設立 — 2011年



S.S生(2002年卒)

2 010年に国際交流基金のプログラム(任期10か月)でリアウ大学の日本語教育学科に派遣され、それがきっかけで2011年に日本語学校を設立しました。

設立にあたってはリアウ大学の先生方や学生の皆さんにいろいろ動いていただきましたし、赴任以前から「インドネシアで日本語学校を設立したい」とおっしゃっていた方の出資を受けています。

人脈も資金面も、幸運に恵まれたとしか言いようがありません。

で は、プカンバルはどのような町なのでしょう。統計の数字などはネットでわかるので、個人的な感想や体験を述べていきます。

個人的には、プカンバルは住みやすい町だと感じています。その理由を思いつくまま3点挙げてみると、次のとおりです。

- ひどい渋滞はあまりない
- ショッピングモールが5軒あり、普段の買い物には困らない
- 病院も割としっかりしている

以 前住んだことのあるジャカルタと比べると、やはり不便を感じることもありますが、慣れてしまえば大した問題にはなりません。

それでも、日本人コミュニティが恋しくなることはあります。

2010年にメダン領事館の方とお会いした際には、「プカンバルで在留届を出しているのはSさんだけです」と言われました。届け出ていない方がいる可能性もあるとは言え、1件だけというのは衝撃的でした。

それから10年以上たち、現在、確認できただけでも(わたし以外に)日本の方が2名いらっしゃるようす

が、正確な数字は把握できていません。

それでも町では日本車が目立ちます。バイクもホンダ・ヤマハ・スズキ・カワサキでシェア100%を占めているんじゃないかと思うほどの状況です。

また、次のような店が進出してきています。

- Pepper Lunch
- キムカツ



ユニクロ(オープン初日・2019年4月撮影)



丸亀製麺1号店(2017年1月撮影)

ユ ニクロがオープンした際には、ユニクロインドネシアの駐在員の方が来てご挨拶をされており、感激もひとしおでした。

また丸亀製麺は2店舗あり、在留邦人1人あたりの店舗数がものすごいことになっています。

日系企業だけでなく、ローカルのお寿司屋さんや、たこ焼きの屋台などもよく見かけます。

日本人の数は少ないものの、住みやすく、日本の存在感は感じられる。プカンバルはそんな町です。

これからも日本のファンを少しでも増やしつつ、細く長く日本語学校の運営を続けていきたいと思っています。

エピソード紹介



東京支部グループメールから

今は亡き同期への思い：

大使になった増井正さん

梶谷 昌博(1956年卒)

増井さんは、1952年京都の高校を卒業し、国立2期の我がインドネシア語学科に入学されました。入学直後から将来インドネシアにも行ける書記生試験を受けたいと、前期2年の教養科目の外、書記生受験用の語学等も勉強をされていました。授業では増井・梶谷と座席が近く、彼は外交官志望、私は民間企業にと人生航路等をよく語り合いました。インドネシア語会話など、不満足な授業に対して二人で批判し、高槻の旧陸軍兵舎で、共によく学びました。

春休み中の書記生試験に合格した彼は3年時には来なかったのに、オメデトウの一言も言えませんでした。それからかなり経って、私の2度目の駐在の1963年にジャカルタの日本大使館で増井2等書記官との再会を果たしました。



増井さんは1954年2年修了で外務省入省、語学研修、Malaysia Indonesia等の大使館勤務の後、田中首相の時代に「こんな優秀な人達を総領事止まりではイカン」となり、以降、幾人かの大使への道が開られました。我が語学科卒で大使になったのは増井さんが初めてでした。先駆者として頑張られ、増井さ

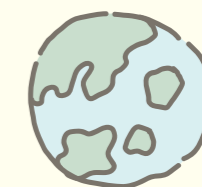
んの後には、浜野さん(60年ホンジュラス大使)、米田さん(60年スラバヤ総領事)、目黒さん(61年パーレン大使)、野瀬さん(62年モザンビーク大使)と錚々たる方が続かれました。

簡単に書きましたが、これは大変な難関コースであり、各位のご努力の賜物であり、私達同窓の誇りでもあります。感服するとともに敬意を表し、お礼を申したいと思います。しかし、その後、後に続く人を伺っていないのは残念です。



増井さんは物静かな情熱家であり、国を思う外交官そのものであり、また大変な人情家でした。公私にわたり、特に官の立場からもご厚誼を賜りました。例えば、大使としての任地のPNG等で我社の駐在員に「おたくの梶谷さんとは同期で大の仲良しでした」と話されてご支援して頂き、私も鼻高々でした。大使の同窓同期への特別な厚情に感謝感激し、南十字星会のあり方のお手本のように理想であると思いました。

大使の外務省勤務の最後の方は、難民関係の責任者として不幸な人の救済活動に尽力されました。一方、退官後は南十字星会の懇親会にもしばしば出席され、省の施設もよく使わせていただきました。



会合では、正義感に溢れ、優しく純粋で、官ならではの厳しいお話も伺いました。一例ですが、当時問題になっていた指示待ち族について「我々の身近にも居るが、机に座っているだけで給与が貰えると思っている。それでいて、立派な不満や批評を云う有名大学出がいたので困る。民間企業ではどうですか」と真摯に憂いておられました。私は「民間も全く

同じです。性格、考え方、生き方、価値観など、人夫々で、大人になれば、注意しても理解出来ないし治らない。勿論、民間では昇進や給与に反映されるが、解雇することが出来ないのです、本人から会社を辞めて貰うのに苦労しました」と俗っぽく説明したりしました。

以降も、お互いにお会いするのを楽しみにしていましたが、健康そうな様子からは想像も出来ない程早く70歳のかなり手前で、臍臓がんで亡くなりました。あまりにも無情で、何時まで経っても増井大使を忘れることが出来ません。神様は自分の好きな善良な人ほど早く御許に置きたいのでしょうか。



増井先輩との思い出

滝本 佳一 (1960年卒)

1964年6月から約2年半、住商のクアラルンプール支店に駐在した時に、増井先輩が当時のマレーシア大使館（シンガポールはまだ独立しておらず）に書記官として勤務しておられ、初めてお目にかかりました。増井先輩が榊谷先輩と同期であったこと、学生時代、会話担当のナジール先生に対し榊谷さんと一緒に強く抗議したことなどを伺いました。



クアラルンプール駐在時代、私は独身でもあり増井先輩宅でご馳走になりながら奥様を交え麻雀を楽しんだものです。増井先輩は毎日熱心に短波放送でインドネシアの国内事情を聴いておられ、1965年の9月30事件についても、増井先輩から色々伺いました。

1968年10月から約2年半、住商ジャカルタ事務所に初めて駐在した時に増井先輩と再会しました。

増井先輩は単身赴任でしたが、当時日本からの円借款ダム建設プロジェクト等で、日本工営の独断場でしたが、その日本工営のジャカルタ支店長が「増井さんには本当にお世話になった。彼がいなければ、全てがうまく進まなかった」と常々話しておられました。



私にとって忘れられない増井先輩との思い出があります。日一イ間の国家的プロジェクトである「アサハン水力発電所」、「アルミニウム精錬所プロジェクト」の初期に、当時のスハルト大統領特別補佐官スジョノフマルダニ将軍と住商ジャカルタ事務所長との会談に私が通訳することになった時の事です。

増井先輩が「君にとってはインドネシアのお偉方とは初めての、それも重要な話だろう。自分はスジョノフマルダニと旧知の間柄だから、紹介方々同行してあげる」と言って頂きました。私の通訳で一応話が終わった後、増井先輩がスジョノさんと笑顔で流暢なインドネシア語で談話されていました。帰宅時、増井先輩から「君はこれからも通訳をするだろうが、通訳の心得として、必ずメモ帳を持参すること。今日のように何も持たずに会談に臨むのは論外」と諭され肝に銘じた次第です。



話は前後しますが、1968年ジャカルタ赴任時は住商ジャカルタにはインドネシア語の達人、榊谷先輩がおられ、重要人物との通訳はすべて先輩がやっておられたが、榊谷先輩の帰国後、事務所長から私が後任に指名されました。そして、インドネシア語のレ

ベルアップのため月謝は高くてもいいから一流の家庭教師から学ぶよう命じられました。すぐさま増井先輩に相談し、先輩自身が留学時代に教わったインドネシア大学教授を紹介していただきました。

私が、その後8回もスハルト大統領との通訳を無事に務められたのは、家庭教師の雇用を指示してくれた住商ジャカルタ事務所長と、立派な家庭教師を紹介して下さった増井先輩のお陰です。

増井先輩からお聞きした話ですが、スハルト大統領が初めて日本を訪問し、昭和天皇にお会された時の通訳が増井先輩であり、帰国時には羽田空港まで大統領の横に座り、あれこれ話し続けられたそうです



増井先輩がアフリカの大使の任務を終えて帰国された後、何十年ぶりか、お宅で奥さまと共にご一緒し昔ばなしに花を咲かせて夜遅くまで美味しいワインをご馳走になったこともありましたが、生前の増井先輩とはこの時が最後でした。

増井先輩のお通夜には榊谷先輩、同期の西田さんと一緒に参列しましたが、その日は雨のそば降る、寂しいお別れでした。

最後に、榊谷先輩のおっしゃるように、増井先輩は後輩を優しく面倒見てくださった方でした。一方、仕事では妥協を許さない、芯の強いお方だったエピソードを、インドネシア元大使（当時は参事官）からお聞きしましたのでこれを結びといたします。

「増井君はインドネシア語がうまいのは当然だが、ある懸案をめぐる当時の大使と意見が合わず、大使、それは違いますと何度も反論し一切妥協しなかったの、聞いていたこちらの方（元参事官）がヒヤヒヤだった」

コーヒーブレイク

不思議な国インドネシア?!?

剣 小平 (1963年卒)



1963年、筆者が戦後賠償関係で駐在していた時には日本と同じ人口規模で、当時、上八でのラーメン（約50円）が同じ値段だった国が、今では世界で4番目の人口を持つASEANのリーダーとして発展している不思議。



「サバンからムラウケ」まで旧蘭領東インド地域を多様性の中の統一共和国として存在している不思議。（世界最多の1万余の島々を擁する国）



今年早々に、国会でジャワ島にある首都ジャカルタ（旧バタヴィア）をカリマンタン島への移転（新首都名ヌサンタラ）を決定した不思議（移転完了は2045年）



21世紀最大の世界的な危機（露軍のウクライナ侵略）の際に、ジョコ・ウイド大統領がロシアのプーチン大統領に面会し、ロシアとウクライナ両国の話し合いの仲介を試みている不思議（インドネシアは2022年のG20議長国）



筆者がインドネシア語を学んだ故か、娘が独身時代に友達を連れて9回もバリ島を旅した不思議と、筆者が今、一番先に旅行したい国に挙げている不思議。